



『疾風勁草』
相双教育事務所長
佐藤 由弘

新型コロナウイルス感染症対策のため、「新しい生活様式」という、以前と比べればかなり窮屈な状況の中での学校生活が強いられています。十年前の東日本大震災後も、放射線への不安から、子どもたちの学校生活は大きく制限されました。しかし、相双の先生方は、「どのような状況にあっても、子どもたちの学びを決して止めてはならない。」、そんな強い信念をもつて最前線で日々頑張っているらしい姿が、そんな姿に本当に頭が下がります。

示したいと考え、相双教育事務所では、二つの資料を発信しました。一つは、「新型コロナウイルス感染症による『新しい生活様式』に対応した授業改善のすすめ」（全四巻）です。新学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善のヒントを、教育事務所の各指導主事が熱い思いを込めて作成しました。

生方とともに、分析・解説し「主体的・対話的で深い学び」へ向けた授業の極意を動画と資料で発信しています。どちらの資料も、子どもたちのために、自らの授業をなんとかしたいと日々悩み、情報を本当に必要としている先生方に確実に届くように、登録していただいたアドレスにメールで直接お届けするという方法で発信しています。資料をご覧になった先生方からは、温かい感想や新たな悩みも返信していただき、指導主事も励みになっています。

未知のウイルスに対して、ともすると不安で押しつぶされそうな、そんな今だからこそ、子どもたちに一番身近な教師がしっかりとつながり、自らの仕事に使命感をもち、ぶれずに前向きに生きる姿を、ロールモデルとして見せていきたい。そんな思いで相双教育事務所は、学校現場を支えていきたいと思えます。



◇教育随想◇
『先人の教えと教訓』
富岡町教育委員会
教育長 岩崎 秀一

「言って聞かせて、やって見せて、やらせてみて、褒めてやらねば人は動かない。」
教務主任、管理職になってから意識していることである。教職員が使命感と責任感、そしてやりがいをもって職務にあたるのが授業をはじめとする教育活動の充実・活性化につながると思えたからである。この中で忘れがちなのが「やって見せて」である。言って聞かせ（指導・助言）てやらせてみるでもいいかもしれない。成功したら褒めればよい。しかし全員がそうなるとは限らない。試行錯誤しながら実践しても思い通りの結果が出ない場合もある。そのときは当然指導が入る。具体的な指導ならばまた挑戦しようという気持ちになるかもしれないが、結果だけにこだわった指導ならばなかなか前に進もうという気持ちになれないかもしれない。

学校への苦情については、まず話を傾聴し、その背景について共感し、一緒にできることを提案してきた。来校者が笑顔になって帰って行く姿を先生方は見ている。これらの対応がすべて正しいとは思っていない。しかし、教職員は、笑顔で、前向きに日々の教育活動に取り組んでいる。教職員は「試行錯誤」「臨機応変」「創意工夫」を合言葉に、子どもたちへ「笑顔 元氣 前向き感謝」の大切さを今も伝えていく。



「学びの時代」に
向かう未来の
教育を相双から

『いたて希望の里学園の
特色ある教育活動について』

飯館村立

いたて希望の里学園

副校長 山田 徹

「先生、見てください。苦
手だった分数の割算で百点を
取りました。」

休み時間での前期課程（小
学校課程）児童と後期課程
（中学校課程）数学担当教員
との会話で、四月に義務教育
学校としてスタートした本校
で日常的に見られるようにな
った風景の一コマです。

本校の特色ある教育活動の
一つに、前期課程四、六年生
を対象に数学科教員が算数科
の授業にT2で参加する「乗
り入れ授業」があります。冒
頭の会話は、児童にとって後
期課程の教員がとても身近に
感じられ、できるようになって
喜びを直接伝えたかった言
葉なのでしょう。このように
小学校教員と中学校教員が相
互に協力することで、校種の
垣根を越えたきめ細かな個別
指導と専門的な教科指導を生

かした授業実践が可能となつ
ています。その結果、「算数
が好き」と答える児童が増
え、苦手意識をもっていた子
どもたちが自信をもって学習
課題に取り組む姿が見られて
います。また、前期課程五・
六年の外国語科と音楽科で
は、中学校教員による「教科
担任制」を導入し、より質の
高い授業を目指しています。

その他にも、探究的な郷土
学習に取り組む「いたて学
学」の新設、児童生徒を認め
・ねぎらい・ほめることで学
習意欲の向上と自己肯定感の
醸成を図る「飯館型授業スタ
イル」の実践、一から九学年
までの様々な学年が交流する
学校行事・児童生徒会活動、
九年間の子どもの姿を見通し
た現職教育や生徒指導などに
も積極的に取り組んでいま
す。

これらの教育活動では、前
期課程と後期課程が情報共有
・協働連携を十分に行った上
で、九年間を見通した小中一
貫教育と児童生徒一人一人に
寄り添った指導を展開してお
ります。このような取組の充
実は、中一ギャップの解消に
もつながります。

本校は、本県被災地で初め
ての義務教育学校として開校
しました。今後も相双地区の
義務教育学校の先駆けとして

特色ある教育活動を推進・改
善し、少人数教育のよさや強
みを生かした魅力ある学校づ
くりを目指してまいります。



【乗り入れ授業の様子】

『学びの楽しさとは』

相馬市立中村第一中学校

教頭 志賀 嘉津美

将来の変化を予測すること
が困難な新しい時代を迎える
にあたり、本校では、教育目
標を「探究」「協働」「創
意」としました。今年度は
「探究」（目指す生徒像・
自らの意思で課題解決に挑戦
し、探究する生徒）を重点に
置き、その具現化のために総
合的な学習の時間において、
地域と連携しながら、探究的

な学習を推進しています。新
型コロナウイルスの影響で、
順調なスタートとはいえませ
んでしたが、生徒はこの状況
の中で課題を探り、その解決
に取り組んでいます。

現状に疑問をもち、常に新
しいものに変えていこうと積
極的に取り組む姿勢を大切に
してほしいとの思いを込めた
本校の重点目標は「なぜだろ
うを解決しよう」です。

三年生は「相馬市の未来を
創造する」をテーマに、十年
後の相馬市の産業や観光はど
うあるべきかを中学生の視点
から提案しようとしています
。修学旅行の訪問先をやむ
を得ず北海道から喜多方市に
切り替え、市産業部商工課や
観光物産協会を訪問し、多く
の情報を収集し、分析しまし
た。二年生は「新型コロナウイルス
と、各教科との関連を図りな
がら様々な疑問を解決し、相
馬市の「新しい生活様式」を
考察しています。「一学年は
「地域を知る」をテーマに、
相馬市の課題を解決しようと
しています。東日本大震災で
大きなダメージを受けた「百
尺観音」を訪れ、観光地とし
ての復興のための再生案を提
案しようとしています。

また、生徒会執行部が自分
たちの学校生活を見直す要望

書を持参して、校長室を訪れ
たことがありました。そこに
は、客観的なデータをもとに
した要望の理由、予想される
メリット、デメリット、さら
にはデメリットに対する対策
などが書かれてありました。

このように生徒は、根拠を
もとにした、「探究」する学
びの楽しさを体得していま
す。生徒たちの「探究」の過
程は、道半ばではありません
が、学校経営の最大のミッシ
ョン「生徒一人一人の可能性
を引き出し伸ばす」をもと
に、生徒も教師もワクワク感
を楽しみながら「探究」活動
に取り組んでいきたいと思
います。



【修学旅行の様子】

『福島イノベーション・コースト構想のトップリーダー 人材育成校としての取組』

福島県立相馬高等学校

教頭 緑川 和裕

「福島イノベーション・コースト構想の実現に貢献する人材育成事業」トップリーダー人材育成分野の実践事業対象校の指定を受けて三年目の完成年度を迎えた。

本事業は、普段の教育活動に加え、様々な研修や体験、探究活動を行うことにより、地域復興・再生に寄与する資質をもった相双地区のトップリーダーを育成することを目標としている。

平成三十年・令和元年度と、一・二年生を中心に、各種講演会・研修会、企業・研究施設見学、課題研究等を実施し、様々な活動に取り組んできた。

そして、令和二年度は前年度に改良を加え、より充実した計画を立案したが、新型コロナウイルスの影響で休業期間が長引き、一時計画は滞った。それでも、県イノベーション・コースト構想推進機構や関係企

業、大学等の協力の下、計画を見直し、当初計画の二ヶ月遅れで本事業の再開にこぎつけた。

七月一日の「ドローン講習会」をかきわきりに、これまで「ブリティッシュ・ヒルズ研修」「福島県イノベーション・コースト構想キックオフセミナー」等の研修を実施することができた。中でも印象的

であったのが、「ドローン講習会」に参加した生徒の一人が、「福島ロボットテストフィールド」を中心に、ドローン関係企業をはじめとする先端産業が地元に進出していることがわかった。大きな可能性

をもっている地元の未来のために、今回の体験を生かしたい。また、大学、学科専攻といった進路選択においても有意義な講習会でした。」とインタビューに答える姿だった。十月以降、予定のプログラムを着実に実施し、取組の

充実に努めたい。コロナ禍により、ソーシャル・ディスタンシングが世の中の常識となった今日、社会

に新たな課題が生まれている。そのような中、本校の校訓である「至誠」の精神で本事業に取り組んだ若駒が大きな抱き、東日本大震災及び原

を担う人材として活躍していただくことを期待せずにはいられない。来年、震災から十年目を迎える。



【ドローン講習会の様子】

『北から南から』 新採用教員として 考えること

相馬市立中村第一小学校

教諭 熊田 優加子

新採用教員として中村第一小学校に着任し、六か月が過ぎようとしています。研修に励みながら教師としての第一歩を歩み始めましたが、毎日

私は今、第二学年の担任をしています。当初は学習指導や学級経営の多くの壁に直面しました。しかし、毎日一人

一人の子どもに寄り添い、思いを受け止めることで、徐々に子どもたちのもつ特徴を把握し、実態に応じた指導ができるようになってきました。

一生懸命準備した授業で、子どもへの「できた」の声が聞こえたり、「学校楽しい」と言

つて笑顔で学校に通う子どもたちの姿を見たりしたとき、教師になってよかったと実感します。

私には理想の教師像があります。それは、子どもの心に寄り添い、楽しいことも辛いことも一緒に共有することのできる教師です。理想の教師

に近づけるよう、これからも学び続け、子どもと共に成長していきたいと思っています。

榎葉町立榎葉中学校

教諭 鹿野 捷人

教員生活が始まり、間もなく半年が過ぎようとしています。日々、授業や生徒指導に励む中で、私は「今日の失敗を明日の糧に」という言葉をモットーにしています。

続き、落ち込んでいたときにこの話を耳にしました。「完璧な人間などいない。人は失敗を通して成長するのだ。」

私は、日々の授業や生徒指導に対して、まずはやってみるといふ姿勢で臨んでいきます。結果だけに一喜一憂する

のではなく、結果を踏まえて自分自身の手立て等を分析し、次への改善へつなげてい

ます。これによって、日々の授業の見直しや積極的な生徒指導ができるようになってきていると感じています。学び続ける教師であるために、今後もこの姿勢をもち続けたいです。

初任者としての今年度は、様々な研修や実践を通して、成長することができると考えています。失敗を恐れず何事にも挑戦し、教師として、成長できるよう日々過ごしていきたいです。

南相馬市立太田小学校

養護教諭 名木 真澄

新採用として太田小学校に赴任し、半年が経ちました。

大学の卒業式が中止になり、

自覚のないまま始まった教員

生活でしたが、子どもたちに

「先生」と呼ばれたことで気

持ちが引き締まりました。慣れない土地や業務に戸惑うこともありますが、子どもたちの笑顔や成長していく姿にパワーをもらっています。

私は、保健室に来室する児童に対し、丁寧な「手当て」をすることを心がけています。大学時代の恩師から、「脈を測る、絆創膏を貼るなどの簡単な処置であっても、人の温かさに触れて子どもは元気になる。それが手当てだ。」と教わりました。来室時には、子どもが求めているケアと一緒に考え、教室に戻った後も継続して様子を観察するようにしています。小さな「手当て」された経験が積み重なり、子どもたちの元気や自信、そして自分を大切にすることができるよう願っています。

この先、大変なことや悩むこともあるかと思いますが、その一つ一つを成長の機会にしたいと思っています。先輩の先生方から教えて頂くことを大切にして、精一杯頑張っています。

教諭として採用され、様々な変化があったが、最も強く感じるのは責任がより重くな

福島県立相馬農業高等学校

教諭 斎藤 是伸

つたということがある。講師として勤めているとき、負うべき責任は教諭のそれと変わらないと考えていた。講師だろうと教諭だろうと、生徒にとつては「先生」に違いはないからだ。今でもその思いは変わらない。しかし、それにもかかわらず重責を一層感じるようになったのは、生徒と関わり合える時間が多くなったからだと思う。

講師は基本的に一年契約だ。そのため、自分が責任をもつて立てられる指導計画は一年間しかなかった。だが今は、三年先を見据えて仕事に取り組むことができています。教科指導では、三年間での学習内容の関連性をより緊密に考えられるようになった。部活動指導では、チームの課題を自分たちで解決させることが多くなった。時間に余裕がある分、生徒に遠回りをさせるゆとりができたのだと思う。ただし、一緒に過ごす時間が多くなるということは、与える影響も大きくなるということでもある。そして教職員にとつて、その大きさは、職責の重さと等しいのだと思う。この重責を噛みしめながら、生徒たちの高校での時間を充実させることができるよう職務に励んでいきたい。

新型コロナウイルス感染症の影響で学校の教育活動においても、三つの「密」を避けるように指針が出されました。そのような状況の中では、「主体的・対話的で深い学び」の対話的な学びは不可能で、一方的な講義形式の授業を進めるしかない・・・という声も聞かれました。そこで、先生方の不安を解消するために、どのように「主体的・対話的で深い学び」を進めていけばよいのか、その道しるべとなるよう、「授業改善のすすめ」を四回に渡って配信しました。ご覧頂く方法を紹介いたします。

「主体的・対話的で深い学び」の推進に向けて

① 右のQRコードをスマートフォンにて読み取ります。



- ② 指定アドレス（相双教育事務所行）へメールを送信する画面につながります。
- ③ アンケート等にお答えいただき、指定アドレスに送信してください。
- ④ 後日、教育事務所担当より「授業改善のすすめ（詳細版）」の案内メールが届きます。
- ⑤ 相双教育事務所ホームページ「授業改善のすすめ」↓「授業改善のすすめ（詳細版）」ページにアクセスし、メール文にある「パスワード」を入力してお進みください。四回にわたって配信された「授業改善のすすめ」をご覧ください。

九月に実施された教育課程研究協議会では、南相馬市立石神中学校、相馬市立中村第二小学校より取組の紹介を頂き、「新型コロナウイルス感染症の影響下における教育課程の実施上の工夫」について、参加された先生方と理解を深めることができました。石神中学校における、国語科・数学科・保健体育科、中村第二小学校における、国語科・算数科・体育科それぞれの取組の中で「主体的・対話的で深い学び」につながる授業

づくりの工夫が図られていました。各校から参加された先生方により、その一端は伝えられていることと思います。また、現在は相双教育事務所Webサイトにおいて「学級・授業づくりWebセミナー」を配信しております。例年であれば夏季休業中に実施しておりましたセミナーを、今年度はオンデマンド配信型Webセミナーとして先生方の授業づくりの学びの場を開

設しました。域内の各校には視聴するためのパスワードを送付しておりますので、パスワードを入力すれば理科、算数・数学コアティーチャー、ふくしま外国語教育推進リーダーの授業づくりのエッセンスをまとめた「極意シート」を開くことができ、そこから、十分間の授業動画を視聴することができます。動画には、授業の様子だけでなく授業者の解説も入っているため、多くの先生方から「大変分かりやすい」と好評を得ています。ぜひ、参考にしてください。

◆編集後記◆

寄稿していただきました皆様には心より感謝申し上げます。

